

テキスト種ウィット分類の試み

植 田 康 成

0 はじめに

ウィットとは何か。これまでさまざまな定義の試みがなされてきた。アプローチの方向もさまざまである。しかし、テキスト種ウィットを総体的に、一括して、その言語的特徴を十全に捉え得た定義は、まだない。テキスト種ウィットを定義することは、不可能事であるのかも知れない。何をウィットと見なすかは、受け手の理解過程に依存しており、その理解過程には様々な要因が関与している。そしてまた、その理解の枠組みも不変のものではない。受け手個人においても、社会的レベルにおいても、理解の枠組みに関わる要因は、絶えず変化している。それ故本論考はテキスト種ウィットの十全な定義を目指そうとするものではない。テキスト種ウィットが現実に存在し、読まれ、語られ、創造されているという事実に基づいて、その言語的特徴を手がかりに分類を試みるものである。つまり、言語コミュニケーションのひとつのあり方として考えるという、語用論的な立場である。そして、テキスト種ウィットが有する言語文化教育素材としての可能性に関する考察に備えることが目標である。

テキスト種ウィットを理解するには、さまざまな知識が要求される。そこでまず、われわれが有している知識の総体を、広義の世界に関する知識 (Weltwissen) と呼ぶことにしよう。世界に関する知識は、さらに種々の知識に分けることができるが、本論考の目標に即して、言語的知識 (Sprachwissen) と、言語外の知識の2つに分けることにする。

言語的知識は、言語学で行われているように、言語レベルに従って、書記・音声 (音韻)、形態、統語、意味、そして語用に関する知識に分けることができよう。そして、ウィットの落ち (Pointe) も、言語レベルに従って、少なくとも音声 (音韻)、形態、統語、意味、語用に関わるものがある。さらに言語外的知識に基づくものを加えて6種となる。

本論考は、これらの6つのレベルにおける、いわばフィルターを通してウィットをふるい分けていくことによって「落ち」进行分类していく。これは、言語的テキストとしてのウィットを、読書行為において理解していくという受容者の観点に沿うものである。いずれかのレベルで「落ち」が確定された時点で、ウィット理解は成立する。

受容者は、フィルターの網の目を構成するあらゆる知識を動員して、テキスト種ウィッ

トを受容する。「落ち」が受容者の既存の知識体系と衝突し、理解困難な箇所に行き当たったとき、受容者は既存の知識体系に基づく理解の枠組みの組み替えを要求される。そして、その組み替えに成功するとき、ウィットの「落ち」が理解され、受容者にひらめき体験 (Aha-Erlebnis) をもたらす。場合によっては、笑いを誘発する。基本的に、ウィットは、受容者の自虐的な行為であるともいえる。自らの無知を笑う契機を提供するものでもいえる。ソクラテス流にいえば、「自らを知る」という哲学的英知を確認する行為でもある。その意味において本論考は、フロイト流のウィット論には与しない。また、社会生活の「潤滑油」あるいは政治的不満の解消を図る「ガス抜き効果」という、社会心理学的な考えとも一線を画す。

1 ウィットの特徴

ウィットとは何か。それは、落ち (Pointe) を含んだ小話といえる。ウィットがウィットであるためには、必ず落ちが必要である。落ちに至るまでの話の流れを形式と意味の両面から捉えることができよう。

1.1 ウィットの形式的特徴

ウィットを形式の点で見ると、基本的には、「導入」と「展開」、そして「落ち」という3つの部分から成っている。

Baron Mucki erzählt Graf Bobby von einem Bekannten, der an Gehirnhautentzündung gestorben ist. "Ja, ja", sagt Graf Bobby, "die Krankheit kenn' ich. Da stirbt man entweder oder man wird verrückt. Ich hab' sie auch schon g'habt." (Hechenberger 1982: 17) (ムッキー男爵が、ボビー伯爵に、知り合いが脳膜炎で亡くなったことを伝えた。「そうか、そうか」とボビー伯爵は言った。「その病気は知っているよ。死ぬか、頭がおかしくなるか、いずれかだ。私もその病気にかかったことがあるんだ。」)

このウィットでいえば、導入は「ムッキー男爵が、ボビー伯爵に、知り合いが脳膜炎で亡くなったことを伝えた。」という部分である。展開部分は「「そうか、そうか」とボビー伯爵は言った。「その病気は知っているよ。死ぬか、頭がおかしくなるか、いずれかだ。」」である。そして「私もその病気にかかったことがあるんだ。」というボビー伯爵の発言が落ちである。しかし、実際のウィットのテキストは、以上の3つの部分から成っているものばかりではない。

'Salve' ist eine Abkürzung von: Säufer aller Länder vereinigt euch. ('Salve' (こんにちは) は、省略語である。もとは、「万国の酔いどれよ、団結せよ」である。)

言うまでもなく、これは、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』 (das Manifest der Kommunistischen Partei) の中の有名な呼びかけ、「万国の労働者、団結せよ」 (Proletarier aller Länder, vereinigt euch) のパロディーである。このウィットでは、導入は「'Salve' (こんにちは) は、省略語である。」という部分である。そして、「万国の酔い

どれよ、団結せよ」という部分が、展開部分でもあり、落ちとも成っている。マルクス・エンゲルスの呼びかけとの対照が、落ちとなっているのである¹。

1.2 ウィットの意味的特徴

1.2.1 Kontrast (対照)

フェルストは、ウィットが笑いを誘発するものであると考える。その笑いは、どのようにして誘発されるのか、その過程についてのモデルを提示するのが、フェルストの著書の目的である。フェルストは、対照 (Kontrast) という意味概念に基づいて、テキスト種ウィットを特徴づけている。

フェルストによると、「ウィットは、日々の生活に関わっている、少なくとも2つの異なった考えを喚起し、その二義的な言明から、対照的な考えが生じることによって、笑いを誘発するような、気慰みのための短いお話である」(Foerst 2001: 148)。

そして、テキスト種ウィットは、次の6つの特徴を持つとしている。

1. ウィットは、短いお話である。
2. ウィットは気慰みに役立つ。
3. テキスト理解から引き出される言明がある。
4. 日々の生活に関わる周知の考えを喚起する。
5. 二重の解釈のプロセスを喚起する。
6. 対照を喚起する (Foerst 2001: 148)。

フェルストが挙げている例を見てみよう (Foerst 2001: 94)。

"Haben Sie dem Patienten schon Blut abgenommen, Schwester Ingeborg?" "Ja, aber mehr als sechs Liter habe ich nicht herausbekommen." (あの患者さんの採血はもうすませたのかね、インゲボルクさん?) 「はい、でも6リットル以上は採れませんでした。」)

患者、血液、看護師という語彙から、おそらくこの2つの発言は医師と看護師の間で行われたものと理解するだろう。だから検査のための採血だと理解するだろう。検査のための採血であるならば、通常は、少量で用が足りる。医療行為は、病気を治し、生命を救うのが目的である。しかし、6リットルも血液を抜き取られると、人は死んでしまう。医療行為の目的と、看護師の実際の行為が矛盾しているという点に、対照が存在し、ウィットの落ちがある。ブラックジョークでもある。

1.2.2 Skript (スクリプト)

フェルストがいう「日々の生活に関わっている考え」とは、スクリプト、フレームと理解できるものである。スクリプトというのは、最近の認知心理学で提出されているものであるが、ある言語社会集団成員間に共通な行動の流れに関する知識とでもいうべきものである。たとえば、電車の乗車券を買うという行為を考えてみると、それは連続して行われる一連の行為の集まりとして捉えることができる。我々が日常行っている行為に関して持っている、いわゆる手続き的知識の一つ一つがスクリプトである。ウィットは、従って、行動パターン間の対立に基づいていると言い換えることもできる。たとえば、次のウィットは、そのような期待のはぐらかし、行動パターンのギャップをよく示している。

Graf Bobby rammt beim Parken ein Auto. Gleich sammeln sich Neugierige. Unter ihren Augen

schreibt Graf Bobby einen Zettel, klemmt ihn unter die Scheibenwischer des beschädigten Wagens und fährt davon. Als der Besitzer kommt, liest er: "Dies schreibe ich, damit die Zuschauer denken, ich lasse meine Adresse da. Das war ein Irrtum!" (Hechenberger 1982: 18) (ボビー伯爵、駐車しようとして他の車にぶつめた。すぐに野次馬が集まってきた。衆人環視の中で、ボビー伯爵は、紙切れに何かを書き付け、へこんだ車のフロント・ガラスのワイパーに挟んで、去っていった。ぶつけられた車の持ち主が戻ってきて、紙片を読んだ。「野次馬たちは、住所を書き残したと思っただろうが、それは思い違いだ！」)

野次馬たちだけでなく、このウィットの受容者も、ボビー伯爵が、車の所有者に自分の連絡先を書いて、ワイパーに挟んでいったと考えるだろう。通常はそうするからである。しかし、紙切れに書き付けられていた文章は、その期待を裏切るものである。通常の行動パターンと、実際にボビー伯爵がとった行動が食い違って(ズレて)いる。あるいは対立し、対照を成しているのである。矛盾しているのである。

2 テキスト種ウィット分類の試み

2.1 ウルリヒによる分類 (Ulrich 1980)

ウルリヒは、二層から成るコミュニケーションモデル²に基づいて、5つの類型を提案している。

1. 誤評価のウィット (Fehleinschätzungs-Witz)

Es ist Mittagsrast beim Schulausflug. Ein Geizkragen sitzt in der Wirtschaft bei einem Glas Limonade. Da muß er dringend mal raus. Weil er Angst hat, es könne ihm jemand die Limonade austrinken, schreibt er auf einen Zettel: "Ich habe reingespuckt." Als er zurückkommt, steht darunter: "Ich auch."

(Ulrich 1980: 54) (遠足の昼休み。けちん坊の男がレストランでレモネードを飲んでいて。子供たちが入ってきたとき、男は小用で席を立たざるを得なくなった。誰かがレモネードを飲んでしまうかもしれないと考えた男は、紙切れに書き付けた。「唾を吐き入れてあるぞ。」男が帰ってくると、その下に次のように書いてあった。「僕もそうしたぞ。」)

2. 誤解のウィット (Mißverständnis-Witz)

Am Telefon: "Hier Schuhhaus Tritt!" - "Oh, ich fürchte, ich habe die falsche Nummer gewählt." - "Macht nichts, wir tauschen um." (Ulrich 1980: 55) (「もしもし、トゥリット靴屋です。」 - 「すみません。ナンバーを間違えました。」 - 「問題ありませんよ。交換いたしますよ。」)

3. 暗示のウィット (Anspielungs-Witz)

Zwei Männer sitzen im Wirthaus und streiten. "Ich möchte wissen, was dich noch von einem Idioten trennt!" - "Nur der Tisch!" (Ulrich 1980: 56) (2人の男がレストランで口論していた。「おまえと馬鹿者を隔てているものが何か、知りたいね！」 - 「このテーブルだけだよ！」)

4. 暴露のウィット (Enthüllungs-Witz)

"Liebling", sagt der junge Mann zu seiner Frau, "ich glaube, im ganzen Ort gibt es nur eine einzige Frau, die ihrem Mann treu ist." - "Wirklich? Wer soll das denn sein?" (Ulrich 1980: 60) (「ねえ、おまえ」と、若い夫が妻に向かっていった。「この村中で、夫を信じ切って尽くしている妻というのは、一人しかいないと思うよ。」 - 「本当？その方は、誰なの？」)

5. 誇張のウィット (Übertreibungs-Witz)

"Sag mal", fragt Erich seinen Freund, "redet deine Frau immer noch so viel?" - "Und ob! Im Urlaub hat sie sich einen Sonnenbrand auf der Zunge geholt." (Ulrich 1980: 60) (「おい」と、エーリヒが友達に尋ねた。「おまえのかみさんは、いつもあんなにおしゃべりなのか？」 - 「おしゃべりなんてものじゃないぜ！この休暇中には、舌が日焼けしたくらいだぜ。」)

2.2 筆者による分類の試み

2.2.1 登場人物・内容による分類

たとえば *Die besten Witze von A-Z*. (Kunschmann 2003) の巻末索引 (Register) には、259 の項目があがっている。259 の項目は、まず、人間と、動物、それ以外のものの3つに大別できる。それ以外のものには、幽霊 (Geister) といったものがある。植物はウィットには登場していない。

動物については、さまざまな動物が登場するが、それらの動物には特定の性質が付与され、その性質が笑いの対象となっている。当該の動物が実際のウィットに描かれているような性質を有しているかどうかは、生物学的には自明ではない。

人間については、さまざまな観点からグループ分けすることができる。まず、挙がっている項目の多くが、職業に関するものであることに気づく。現在において存在している職業、およびそれらの職業を営んでいる人々に関するウィットが原理的には存在し得るといっていいだろう。性別によってグループ分けすることもできる。また、人間関係、とりわけ類縁関係によってグループ分けされている場合が多い³。

挙がっている項目の多くは、Angestellte (会社員)、Anwälte (弁護士)、Arbeiter (労働者) 等の職業名である。さらに Alemannen (アレマン人) などのドイツ語圏の方言の基盤となっているかつてのゲルマン民族に属する一部族、その言語 (現在のドイツ語の一方言)、当該の種族が住んでいた地域に関わるウィット、あるいは Briten (ブリテン人) をはじめとするヨーロッパの各国、各地域の人々や言語に関わるウィット、さらには世界の各国民、言語に関するウィットがある。

ここでは、259 の項目を、以下の 12 の項目に還元して、分類してみた。

1. 身分：貴族、2. 諸国民：アメリカ人⁴、3. 法的関係：被告、4. 職業：会社員、5. 趣味・嗜好：釣り人・喫煙者、6. 地方 (人)：バイエルン (人)、7. 外面的特徴：ブロンドの女性、8. 内面的特徴：思索家、9. 人間関係：隣人、10. 架空の存在：幽霊、11. 世代・家族・性：父親、12. 動物：象

クンシュマンによるウィット集の索引に挙がっている 259 の項目と、個々の項目で挙げ

られているウィットの数を表にしてみれば分かることだが、このウィット集に限って言えば、一番多くのウィットが挙げられているのが、夫婦 (Ehepaar) である (26)。その次に多いのは、患者 (Patienten) (24)、生徒 (Schüler) (24)、ウェイター (Kellner) (22)、単純な人 (Naive) (20)、教授 (Professoren) (19)、テレビを見る人 (Fernsehzuschauer) (17) である。会社員 (Angestellte)、映画スター (Filmstars)、顧客 (Kunden)、神経症患者 (Neurotiker) については、ともに 16 が挙げられている。1 つしか挙げられていない項目は、競売人 (Auktionatoren)、花嫁 (Bräute)、利を得た人 (Gewinner)、大家 (Hausmeister)、芸術家 (Künstler)、ピアニスト (Pianisten)、チーズ製造小屋 (Senner)、用心深い人 (Vorsichtige) の 8 つである。

登場人物・内容による分類は、それらのウィットに登場する様々な人物たちに対するステレオタイプに基づいているとも言える。また、本論考が対象としているウィットは、ドイツ語のウィットである。従って、それらのテキストは、ドイツ語文化圏におけるそれらの人物たち、職業が、社会的にどのように見られているかについての情報を与えてくれるものでもある⁵。

2.2.2 落ち (Pointe) の性質による分類

言うまでもなく、ウィットのウィットたる所以は、その落ちにある。従って、ウィットは、その落ちの性質によっても分類することが可能であろう。

ウィットの落ちは、さまざまな言語レベルにおいて観察することができる。ウィットは、当然に言語的テキストである。ウィットの落ちは、言語的テキストの理解に基づいて生じる。どの言語レベルにおいて、落ちの理解がなされるのか。5 つの言語的レベルに、言語外の知識のレベルを合わせて、6 つのレベルにおいて落ちの存在が観察される⁶。以下、それぞれの言語レベルにおける落ちがどのようなものであるのかを、紙面の許す限りで、実例を挙げながら説明していくことにしよう。

2.2.2.1 音声レベルにおける落ち

落ちが、アクセント、イントネーションに基づいている場合がある。どの語を強調するか、どのような抑揚で発話するか、といったことで、落ちが構成されている場合である。

"Als ich dich heiratete, war ich ein schöner Trottel", sagte Ulli zu seiner Frau. "Stimmt nicht", gibt die zurück. "Schön warst du nie." (Kunschmann 2003: 102) (妻に向かって、「お前と結婚したとき、自分は何も分かっていたいなかった」と、ウーリ。妻は言い返す。「それは違うわ。」「一度もハンサムだったことはなかったわ。」)

このウィットの落ちは、「schön」という語の曖昧さにある。しかし、「schön」が「愚か者」を反語的に強調する「全くの」という意味を持つには、しかるべき抑揚、アクセントを伴って発話される必要がある。そうでなかったからこそ、妻は、言葉通りの意味で理解し、「一度もハンサムだったことはなかったわ。」と言い返しているのである。もちろん、夫の発言中にある「schön」という語がもつ反語的な意味を理解した上で、敢えてそれを無

視して、言葉通りの意味で理解したように言い返しているということも考えられるが。

2.2.2.2 形態および統語レベルにおける落ち

次のウィットの落ちは、形態および統語に関する規則を十分に理解していなかったため生じた、誤った語の理解と構文分析に基づいている。

"Gestern bin ich in einem Bus gefahren, in dem lauter Dichter saßen." "Aber, woher willst du denn wissen, dass es sich tatsächlich um Dichter gehandelt hat?" "Nun, weil der Fahrer immer rief: **Dichter** zusammenrücken." (Kunschmann 2003: 110) (「昨日乗ったバスは、詩人ばかりだった。」
「本当に詩人ばかりだったと、どうして分かったのか。」「運転手が、詩人はお詰め合わせ願います、と叫んでいたんだ。」)

バスの運転手の"Dichter zusammenrücken" (お詰め合わせ願います) という発言に含まれている"dichter"は、"dicht" (密に) という副詞の比較級であるが、乗り合わせた一人の乗客は、名詞"Dichter" (詩人) であると理解したのである。つまり「詩人である者は、詰め合わせて乗ってください」という発言だと理解したのである。詩人がたくさん乗り合わせているバスであることに驚いて、友人に話すことになったのであろう。

2.2.2.3 意味レベルにおける落ち

量的には語の多義性にもとづく落ちを持ったウィットが多いといえるのではなかろうか。

[語の多義性にもとづく落ち]

"Na, wie finden Sie mein neues Fachbuch, Herr Kollege?" "Tja, trotz der vielen **Quellen** sehr, sehr trocken." (Kunschmann (Hrsg.) 2003: 281) (「きみ、私の新著はどうかね。」「いやはや、何とも。あふれんばかりの引用だが、無味乾燥だね。」)

"Quelle"には、「泉」、「原典」という意味がある。たくさんの泉があるにもかかわらず、無味乾燥な本であるという批判である。そして"trocken"にも、"Quelle"がもっている2つの意味に対応して、「乾燥している」「無味乾燥である」という2つの意味がある。それぞれの対応する意味を取って交錯させて理解している点に、このウィットの落ちがある。

[句の多義性にもとづく落ち]

"Der Bauchredner ist toll!" schwärmt die Seiltänzerin. "Warum?" will der Stallbursche wissen. "**Er redet, wie ihm der Nabel gewachsen ist.**" (Kunschmann 2003: 30) (女綱渡り芸人が言う、「あの腹話術師はすごいわ。」と。「どうして?」と厩舎係の小僧。「あの人は臍から生まれたように話すわ。」)

ウィットの落ちとなっているのは、太字下線の部分であるが、この表現は「遠慮会釈なくしゃべる」という意味のイディオム表現"reden wie einem der Schnabel gewachsen ist"にある"der Schnabel" (くちばし) を"der Nabel" (臍) で置き換えたものである。腹話術師だから「くちばし」ではなく「臍」というわけであるが、ドイツ語では"Schnabel"と"Nabel"が共通の音節をもっている点も、駄洒落となり、落ちの効果を強めている。

2.2.2.4 語用のレベルにおける落ち

Im Musikunterricht. Der Lehrer fragt Sabine: "Kannst du den Kammerton A singen?" Sabine singt ein A. "Und nun G!" "Auf Wiedersehen!", sagt Sabine und geht. (Reitberger 2003: 32) (音楽の授業。先生がザビーネにいう:「A (ラ) 音を出して。」ザビーネはラ音を出す。「次は、G (ソ) 音を出して。」「じゃ、さようなら。」と言ってザビーネは教室を出て行った。)

先生は、「さらに G (ソ) の音を出してごらん」、といったつもりであったのに、ザビーネの方では、すでに課題は終わったので、「帰りなさい」という指示だと聞いたのである。発話の意図を取り違えているのだが、動詞"gehen"の命令形が G と同音の"geh"であるのを、ザビーネは自分に都合のいいように理解して、「さようなら!」と言って家に帰ってしまったのである。

2.2.2.5 言語外の知識に基づく落ち

Eine junge Frau sitzt mit ihrem kleinen Sohn einem älteren Herrn mit einem langen, rötlichen Bart im Autobus gegenüber. "Guck mal, Mami", kräht der Kleine, "das ist Barbarossa." "Sei nicht albern", tadelt die Mutter, "der ist doch schon lange tot." "Aber nein, Mami - er hat sich doch eben noch bewegt." (Kortmann 1970: 86) (幼い男の子を連れてた母親、赤みがかった顎髭をたくわえた年配の男の人と向き合っ、バスに乗っている。「見てよ、ママ!」と子供が叫んだ。「バルバロッサ (赤髭王) だよ。」「馬鹿なことを言うんじゃないよ。」と子供を叱る母親。「赤髭王はずっと昔になくなったんだよ。」「いや生きているよ、ママ。ちょうど今動いたよ。」)

バルバロッサ (赤髭王) は、16 世紀の神聖ローマ帝国の王フリードリフ 1 世のことである。赤い顎髭を生やしていたので、「赤髭王」と呼ばれていた。おそらく、子供はその赤髭王の絵をどこかで見たことがあると思われる。その記憶に基づいて、子供は、目の前の年配の人の髭をさして「赤髭王」だと言ったのであろう。それに対して、母親は歴史に関する知識に基づいて子供の間違いを正そうとしている。しかし、子供の方では、「赤髭王」は赤みがかった顎髭をたくわえた男の人を意味する語であると理解しているのである。言語習得の過程で観察される過剰般化 (overgeneralisation) である。子供は独自の意味理解に基づいて発言しているという事実に母親は気づいていない。ウィットの落ちは、歴史上の人物と現存の人物という対比に依拠している。

Treffen sich zwei Planeten, fragt der eine: "Wie geht's?" "Schlecht, ich hab Homo Sapiens." Darauf der erste: "Oh wie schrecklich! Das hatte ich auch mal." (Berger: 94) (2つの惑星が出会った。「どうかね?」「よくないね。ぼくのところには、人類が住んでいるんだ。」「なんと!それは最悪だね。ぼくのところにも以前人類が住んでいたんだ。」)

ケストラーの著書に"*Der Mensch - Irrläufer der Evolution*" (人類—進化を誤ったもの) というのがある。歴史年代を「ヒロシマ」を起点に数えることを提唱し、ヒロシマ以後の世界に警鐘を発している重い内容の本だが、人類が生命の歴史において異常な方向へと進化していった存在であるというのが、ケストラーの主張である。そして、人類は進化を誤っ

た存在であるが故に、地球自然そのものの破壊者となってしまうという認識が上のウィットには表明されている。人類こそ自然の破壊者であるということは、原爆、原発、そして地球温暖化と列挙するだけでも十分であろう。人類による地球規模の自然環境破壊の進行という、危機的状況を背景として上のウィットは語られているのであり、その落ちが理解可能となっているのである。

3 まとめ

テキスト種ウィット分類の試みは、極論すれば、研究者の数だけあると言っても過言ではない。それぞれの研究者が、それぞれの理論的関心、研究方法に従って、独自の類型化、分類、特徴付けを行っている。従って、本論考の目的は、屋上屋を架すことにあるわけでは、もちろんない。すでに提案されている分類の試みの一部を概括的に論述し、筆者自らの試みを対置することによって、テキスト種ウィットというものが多様な考察を許容するものであること、それ故に言語文化教育素材という点においても多面的な取り扱いの可能性があることを示すことにあつた。

4 注釈

1 ジョークの特徴を、小泉（1997）は、形式と内容の両面から捉えている。そのポイントは、メタファーとジョークが同じ構造をしているというものである。違いは、メタファーが共通項を隠しているのに対して、ジョークはその共通項を落ちとして提示する点にある。すなわち、次のウィットのテキストについていえば、自動車のタイヤと男の共通点、それを隠して問いかけるときには謎々となり、一方共通点を隠したまま同等のものとして提示するときにはメタファーに、共通点を落ちとして説明するときにはウィットになる。このウィットの落ちそのものは、語の多義性に基づいている（aufgeblasen、Profil、überfahren いずれも二義的である）。

Susi Steilzahl weiß, wie Männer sind...nämlich wie Autoreifen: "Ziemlich aufgeblasen, ohne Profil und stets bereit, einen zu überfahren. (経験豊かなズージュによると、男は自動車のタイヤと同じだという。「虚勢を張って大きく出ているが、かっこはよくない。そして、いつでも人を轢き倒そうとしている。」)

2 ウィットは、現実の話し手と聞き手の間に位置している言語テキストである。そして話し手によって語られるウィットという言語テキストには多くの場合特有の人物が登場し、話し手と聞き手として会話をを行っている。この意味で二層のコミュニケーションモデルとなっている。

3 ウィットの多くが対話の形をとっているため、そこにはさまざまな人々が登場している。登場人物たちの職業、性別、社会階層、世代、外面的および内面的特徴といったものによって分類することも可能であろう。事実、多くのウィット集が、そのような観点からウィットをグループ分けして提示している。個々の分類項目に属するウィットを集めて、たとえば「医者に関するウィット」、「ブロンドの女性についてのウィット」と言ったウィット集も数多い。

4 コロンの後に挙げた語は、たとえば、ウィットの種類の一例である。「アメリカ人」とあるのは、諸国民に関するウィットがあり、その一つとしてアメリカ人に関するウィットがあるという意味である。

5 そういった情報はランデスクンデに関するものである。ウィットを素材とするランデスクンデ展開の可能性については、他の場所で具体例に基づいて詳述してある(植田 2007)。

6 本論考では各々の言語レベルにおける落ちを基準としてテキスト種ウィット分類の試みを行っているが、観点を換えれば、各言語レベルにおけるドイツ語文法項目を扱う素材としても利用できる。ウィットを素材とするドイツ語文法項目の取り扱いについては、他の折に多くの例を用いて詳述した(植田 2006)。

5 参考文献

Berger: Jens Berger, *Die besten Schülerwitze*. Paderborn: Voltmedia. (ohne Jahresangabe des Erscheinens)

Foerst 2001: Reiner Foerst, *Die Zündung des Witzes : eine umfassende Untersuchung der humorbedingten Auslösung des Lachreizes*. Gummersbach: Dr. Ing. Reiner Foerst Verlag GmbH.

Hechenberger 1982: Freny Hechenberger, *Kennst du den? : 1000 Witze u. wie man sie sich merken kann*. München u.a. : Knauer.

Koestler 1978: Arthur Koestler, *Der Mensch - Irrläufer der Evolution: die Kluft zwischen unserem Denken und Handeln - eine Anatomie menschlicher Vernunft und Unvernunft*. (übertragen aus dem Englischen von Jürgen Abel) . Bern/München: Scherz.

小泉 1997 : 小泉保 『ジョークとレトリックの語用論』、大修館書店。

Kortmann 1970: Erhart Kortmann, *Die besten Witze der Zeit*. Hamburg: Hoffmann und Campe. (3. Auflage 1972)

Kunschmann 2003: Doris Kunschmann. *Die besten Witze von A-Z*. München: Bassermann.

Reitberger 2003: Reinhold Reitberger, *Mega Schülerwitze 1000 Sachen zum Lachen*. Bindlach: Loewe Verlag.

植田 2006 : 言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーウィットに見るドイツ語文法一、『広島大学大学院文学研究科論集』第 66 巻、67-87 頁。

植田 2006 : 言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーウィットに見るランデスクンデー、『広島大学大学院文学研究科論集』第 67 巻、55-73 頁。

Ulrich 1980: *Der Witz im Deutschunterricht*. Braunschweig: Westermann.

(本論文は、「科学研究費補助金」(基盤研究(C)、課題番号:17520379、研究課題:言語文化教育素材としてのテキスト種ウィットーその潜在的可能性に関する基盤的研究)による研究成果の一部である。)